

書 評

サンドラ・ハーディング著 森永康子訳

『科学と社会的不平等』

高 岡 素 子

本書は西洋社会の知識階級や近代科学を実践している科学者たちが今まで認識することが難しかった状況に注意を向け、現代という歴史上の一時点における状況をポストコロニアリズム、フェミニストの視点から批判的に検討したものである。それは、近代西洋科学のもたらす恩恵は、特定の誰かに与えられ、反対にそのコストやリスクは誰が負うのかについて分かりやすく説明されている。

近代西洋科学は、社会に対して多大な影響力をもっているが、道徳や政治に対して、西洋科学がどのように関与しているかについての考えは多様である。とりわけ科学者と呼ばれる人の大部分は、科学は社会において中立であり、政治や経済とはまったく異次元の学問であると認識している人が多いと考えられている。しかしながら、本書では西洋科学が決して政治経済と関係がないものではないこと、「政治的無意識」について強く論述している。

筆者が述べるように、近代西洋科学の持つ「政治的無意識」は、科学者や一般の人を誘導し、ローカルにもグローバルにも階級だけではなく、ジェンダー、人種、民族などにおける不平等を推し進めているのだろうか。中立であるはずの「本物の科学」とは何か。「唯一の科学」とは存在するのであるだろうか。何をもち「社会全体の幸福」とみなすのか。こうした疑問について答えにつなげるために科学哲学の見地から筆者は論じている。

「科学 (Science)」という用語は、西洋の知識生産のみを意味するものであり、そうあるべきであると信じられてきた。多様な歴史を経ていること、そこに貢献した人々が多様であることから、近代西洋科学ほど国際的に通用する科学は他にはない。つまり、中国やアフリカの天文学のように、ある意味で科学の合理性という基準から離れた西洋科学以外の非西洋科学の知識は知性の範囲を超えるものとみなされ、それゆえ科学としては認められないとされてきた。

近代西洋科学は、自然と文化の境界がどこにあるかを示す、正確で有力な経験的証拠を見出しているように見える。つまり、「科学の性質」に関する論争の中心は、厳密に自然と考えられてきた領域に、文化がどのくらい入り込んでいるかという問いなのである。

本書では、偏見を持った科学者が非常に多く存在し、意図的な人種差別のプロジェクトが、今もなお続いている事実が述べられている。人種が分離されている社会構造が広がり、勢力を持っているような社会が白人至上主義の正当化や維持に関わらないような科学を生み出せるものだろうか、という疑問が浮かぶ。

19世紀初頭から、生物学やバイオ医学はヒトを分類してきた。それは、肌の色や髪の色、その他の人体的特徴一つ一つが白人至上主義のプロジェクトの中で遂行されてきたことを筆者は述べている。そもそも「人種」とはどういったものなのか。それは生物学によって定義されるべきことなのか。それとも全面的に社会的に構築されたカテゴリーで、科学的には意味のないことなのか。そしてまた、人種とは、常に生物学的な意味を持つと同時に、社会的な意味を持ち合わせるものなのか、について考えさせられる。

これらのアプローチで問題となるのは、科学者が特別な手法により、身体を観察、測定し、介入することである。つまり、科学者の背景には、文化的や政治的な価値観や、仮定が滲み出ると筆者は論じている。

身体は常に自然なものであり、かつ文化的なものであり、生物学的にも社会的にも人種を定義できると考えられる。筆者が述べている人種差別的な科学実

践に対する批判は、科学的情報技術が人種差別的なプロジェクトに向けられていることについてであり、アフリカ系アメリカ人の生活保護受給者への不妊手術や、ユダヤ人、ジプシー、プエルトリコ人に対する医学実験、西洋科学的な手法により得られた生殖に関する知識や技術を、人種差別的なことに利用することへの批判である。つまり、近代学技術は、すでに経済的、政治的に有意な人々のみに恩恵が与えられ、最も不利な人にはそのコストが分け与えられ、決して中立ではないということが論じられている。

また、それに加え人種上の「マイノリティ」は、教育機関や研究所、さらに人種の特権階級にいる教師や雇用主、同僚から侮辱され、屈辱的な扱いを受けてきた現実について説明している。アメリカでは科学者としての能力があっても、有色人種で名誉ある地位に就任することは稀であることはあまり知られていないことではないだろうか。

ヨーロッパの大航海時代はヨーロッパ文化と多くの有色人種との遭遇をもたらした。ヨーロッパ科学はヨーロッパ帝国の拡大を可能にし、植民地を形成した。これは、ヨーロッパの人種的、文化的他者の征服を意味し、この時代のヨーロッパの植民地主義、近代科学の発展から、人種の差別を切り離すことは不可能である。

西洋の技術や科学的合理性を第三世界側に移転することで、西洋世界が第三世界を「破壊的」かつ「搾取的」に開発してきたと筆者は述べている。さらにヨーロッパ系の人々は未だに、ヨーロッパ以外の他の文化の知識体系が、自然や社会に関する人間の貴重な知識の宝庫として機能していることを否定していることを指摘している。

近代西洋科学が有害な環境を生み出すことで起こる最悪な影響は、世界の中で最も脆弱な人々に向かう。その人々のほとんどは白人ではない。また、近代西洋科学はアイデア、技術、材料を、常に他の西洋以外の文化から借用してきた。しかし、それはすべてではなく、西洋にとって不協和音を起こさず、取り込むことのできるものに特定され、西洋の科学によって知識と認められず、価

値のないものは切り捨てられてきた。科学の主導権はすべて西洋にゆだねられてきた事柄が詳しく説明されている。

本書では、西洋以外の諸国での科学プロジェクトは、西洋諸国から切り離されるべきであると断言している。そして、世界中の土着の科学伝統は、自分たちの固有の伝統の中に統合したいと願う西洋の科学の一部を受け入れることによってより強固となり、伝統に関するローカルアイデンティティを損なわずにすむだろうとも述べている。

筆者は、長年の西洋科学の傲慢さについて、また西洋科学がもたらす弱者に対する被害について深く追求し、そのことを伝えようとしている。

科学を学んでいる私たちも、最先端といわれる科学、主に西洋諸国で研究されているような科学をお手本にし、その恩恵を享受していることはまさしく事実である。そのような最先端の科学発展の背景には、筆者が述べるような残酷な現実が存在している。一人でも多くの科学者にそのことを認識してもらいたいという筆者の熱い思いを感じた。

一方、フェミニストは十九世紀後半から科学の中における女性への差別や、科学による女性への差別を論じてきた、科学、医学、工学、数学分野の社会構造における女の子や女性に対する差別についての不満を語っている。近年では一般的に知られている「ジェンダー」という用語も多用な意味を持ち、使い方もまた多様である。ジェンダー化されるアイデンティティは流動的で歴史的な現象であり、世界や世界についての人間の理解が変わるにつれ変化するものである。

人種問題と同様に、人種とジェンダーの交差を考慮した科学プロジェクトをフェミニストの焦点に取り組むことは非常に困難である。その最大の理由は、科学者やフェミニスト科学論者の中に占める有色女性の割合はきわめて低いことを筆者は指摘している。女性科学者は「フェミニスト」というラベルを貼られることを拒否しながらも、科学のテーマにおいてこれまでとは違う疑問を持ち、ある意味で異なった科学を行っている。これは大規模な「男の子たち」の

プロジェクトから排除されるがゆえに、同僚からの援助が最小限でもやっているような「隙間プロジェクト」を発展させ、科学をすることが好きな女性は、女性性や女らしさが科学と結びつくことに対して敵意が持たれるような状況の中で、自分のジェンダー化されたアイデンティティと折り合いをつけないと筆者は論じている。

ここで述べられているジェンダーと科学の関係についての問題は、まさしく私たち女性科学者が直面している問題であり、筆者の意見に深く同感できる部分が多かった。私たち科学を研究している女性が抱えているばんやりとした不安感や、男性の科学者たちに対する理由のはっきりしない不信感について客観的に解析し、的確な言葉で表現している。ただ、科学が好きであるということではやっていけない現実の理由が明確にされており、毎日をがむしゃらに進んできた多くの女性研究者が、筆者の言葉に納得し、癒されていることと思われる。

一方、科学が提供する資源の一部は軍備に使用され、また環境破壊を深刻化させていることについて述べられている。私自身も遺伝子組み換え植物を作出するプロジェクトに関わっている時は、自然環境になんらかの影響を直接与えるのではないだろうかと危惧することもあったが、それよりも先に、実験の細かなテクニックなどの自分だけの小さな科学世界の方に興味の方向性は向いており、毎日の実験がつつがなく進行することに全精力を注いでしまっていた。最先端の科学に従事している場合、そのような研究者は少なくないと考えられる。軍事兵器の研究などのように直接戦争に関係している研究は除いて、自分の研究が多くの人々に対して恐怖や不幸を与えているということを考える時間もなく、研究に没頭している。

西洋科学は社会的に快適な生活をすべての人に提供することを目的としていたはずであるが、現実には世界のエリートに科学の資源や成果の大部分を与え、マイノリティや西洋以外のすでに苦しんでいる人々を犠牲にしていると筆者は述べている。科学が提供する資源は、軍備に使用され、環境破壊を深刻化

させ、世界の政治的経済的に最も弱い立場の人々にとって、悲惨な結果をもたらしていることを力説している。

また、西洋の近代科学は、観察可能なもののみを見て、実際に観察したいと思っているもののみを實在として扱い、美的、道徳的、精神的、社会的、文化的、政治的な現象を排除してきた。そのことから、科学はそれ自体が「国家理性」となり、国がグローバルな立場で権威を主張する際に利用されるようになったことを筆者は非難している。

筆者は本書においてフェミニズム、ポストコロニアリズムの見地から、一貫して近代科学に対して批判を述べている。筆者の数々の論文に基づいている論理的な近代科学に対する批判は、近代科学を研究の柱として研究を続けている私にとって、正直なところ簡単に納得することができなかった。本書の中に、意図したとしても、意図していないとしてもということばがたびたび使われている。私の研究が世界のどこかの人々になんかしらの不平等や不幸を引き起こしている可能性がないとは断言できない。筆者の述べるように、このようなことを意図していなくても、科学を研究することは罪なのであろうか。筆者の近代科学に対する痛切な批判をどのように理解すればいいのかと戸惑った。

私が筆者の科学批判を容易に納得できないのは、私の科学論に対する無知が起因している。様々な理由により、一般的に理系分野の中に科学論の領域は含まれていない。しかしながら、それも「もはや筋の通ったものではない」と筆者は断言している。大多数の理系研究者たちは、フェミニズムやポストコロニアリズムの見地から科学を見ることはなかったが、哲学的、社会科学的、歴史的な仮定が科学的理解の一部を形成していることを忘れてはならないこと、またそうした訓練を受けている人も増えつつあり、国内や国際的な発議により再教育の仮定が加速するだろうと筆者は述べている。本書を読み終えた後、これから近代科学を学ぶ学生のカリキュラムに科学論や科学哲学を取り入れる必要性を強く感じている。

本書で述べられている近代科学に対する批判が単なる科学批判ではないこと

は、最終章を読むことによって理解できた。筆者の本来の狙いは、近代科学に対する批判だけではなく、近代科学がもたらした問題を提起することで、科学者や科学論者での論争を実りあるものにすることが本当の目的であると、私は感じた。これは序章で述べられているが、現代の科学実践の何が問題なのか、そしてどのように改良すればよいかという提案に対しての論争が、まさに今必要なのである。本書はそれを我々に対して気付かせるように警告を投げかけている。まさに今が科学の転換期であると言えるのかもしれない。少しでも多くの科学者たちが本書を手に取り、考え、論争する機会が増えることを心から望んでいる。

科学に直接関わる人も、科学を外側から眺めている人も、著者が本当に伝えたかった内容を正しく理解し、社会の形が転換しつつある渦中で、「より良き世界」を求める人々のために、より多様な人々の刺激的で建設的な論争を期待したい。

(北大路書房、2009年4月、本文251頁、本体2800円＋税)